# 環太平洋文明研究センター

Research Center for Pan-Pacific Civilizations

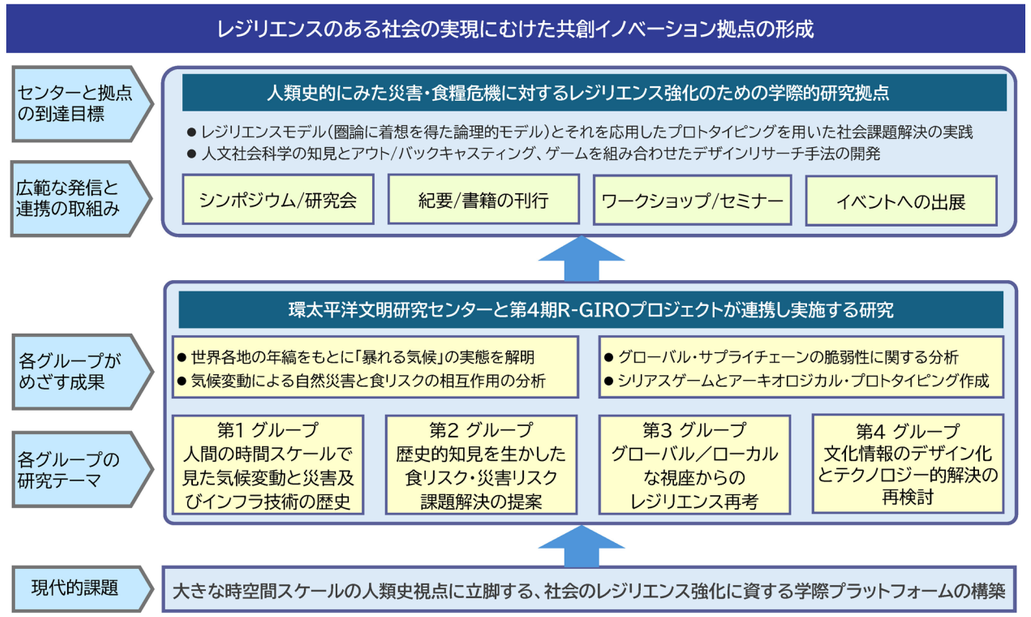
2023年、後藤伸弥撮影

## レジリエンスがある社会の実現にむけた共創イノベーション拠点の形成

立命館大学環太平洋文明研究センターは、環境考古学、文化人類学、地理学、考古学など諸分野を横断する学際的研究組織として2013年に設置され、R-GIROの第2期「地球の自然回帰を目指した自然共生型社会モデルの形成」、第3期「地球規模での人間社会の成長と持続」に参画し、着実な成果を積み上げてまいりました。本センターでは、こうした10年間の研究成果を継承しつつ「災害、危機への挑戦」を前景化させ、さらに学際的な研究センターへと発展させることを企図しております。そこには3つの課題認識があります。第一に、超長期的スパンを扱う古気候学、考古学、地理学と「現代」を対象とする人類学的な研究を架橋し統合する歴史的視点、モデルを構築する必要性。第二に、現代の自然災害と食糧危機の問題とグローバル/ローカルなサプライチェーンや支援との関係解明の重要性。第三に、災害・食糧危機に対してテクノロジーの加速化による一元的な解決を展望する動きが、過去の自然環境の変化と人類の営みから実証的に引き出される警告や人間社会が醸成してきたレジリエンスを軽視することへの危機感、です。

本センターは、2022年度より第4期R-GIRO「自然環境と人口・年齢構成の変化への挑戦を融合した地球共生型社会の実現」に参画しています。そのプロジェクトでは環境と社会の相互作用の蓄積としての人類史の実証的解明をさらに進展させ、災害や食糧危機が頻発する状況におけるレジリエントな社会や文化のデザインに貢献する新たな学際研究の展望を拓くことをめざしています。

人類社会が岐路に立つ現代、頻発する食糧危機や災害に実効性のある解決策を見いだすためには、時間的・空間的スケールの大きな視座に立った研究拠点が必要です。本研究センターに拠点を置く第4期R-GIRO研究プロジェクトでは、環境太平洋地域の環境特性とそこで育まれた独自の文明に立脚し、2つの研究を推進します。第一に、古気候学・考古学・地理学・歴史学・人類学による過去の気候変動と災害・食糧危機に関する実証的な学術研究です。そして第二に、資源地政学、経営学、情報工学、技術経営学、都市政策学、デザイン学などの広い研究分野の研究者の協働により、現代の「災害・危機対応に対する人類社会のレジリエンスを強化する」ための実行力のある提言をおこなうことです。



**年縞とは**
湖底に1年ごとに堆積する薄い層を指し、この堆積層の変化を見ることで、過去の湖周辺の気候の変動や植生の変化などを1年単位で復元することが可能です。

紀要「環太平洋文明研究」の刊行
叢書「環太平洋文明叢書」の刊行
NewsLetterの発行
定例研究会の開催

**主な研究テーマ**

**[人間の時間スケールで見た気候変動と災害及びインフラ技術の歴史]**
- 年縞の分析を通じた「暴れる気候」の実態の解明
- 「暴れる気候」に対する応答としての社会インフラの変容

**[歴史的知見を生かした食リスク・災害リスク課題解決の提案]**
- 歴史学と分析化学の融合研究による食リスクの歴史的解明
- 土地利用、空間利用のあり方から見た災害リスクの歴史的解明

**[食糧危機と災害克服の現在—グローバル／ローカルな視座からのレジリエンス再考]**
- グローバル・サプライチェーンのリスクと地域資源の分配と利用
- 気候変動および大規模自然災害に対するレジリエンスの実証分析

**[食糧危機と災害の未来—文化情報のデザイン化とテクノロジー的解決の再検討]**
- 文化情報に基づく複声的ビジネスプラットフォームのデザイン手法開発
- 自然災害や食糧危機のテクノロジー的な解決の再検討と「文明」の再構築

センター長：小川 さやか（先端総合学術研究科 教授）
主な研究拠点：衣笠キャンパス
お問い合わせ：立命館大学 研究部 衣笠リサーチオフィス内 環太平洋文明研究センター事務局
TEL：075-465-8236 FAX：075-465-8342 ✉：r-ppc@st.ritsumei.ac.jp http://www.ritsumei.ac.jp/research/rcppc/